

秀乃其嘉吉 七

79

585

7.



門 79
藏 585
巻 7



香道秋農光下

新組十品

○根合香ねあわせ小引

大口含翠組

古き物語の集むかしものがたり曰い永義えいぎ六年五月五日
内裏うち・菖蒲あやむす乃根合ねあわせ有あり此こゝと
去さる三月晦日さんげつ堪た能の上うへ達た初はついり
ううと殿上とのうへ人ひと多おほくくたたりりれれ勝か負へ
ありたり又また難かた合あははりり其その後のち負かまま

香道秋農光下

いよもて草蒲の根とありて後更と
 改^{カウ}て了^{マツ}終^{マツ}る也と古来^{コライ}根^ネ香^{カウ}よ^{マツ}矢^ヤ敷^シ
 香^{カウ}園^{エン}雞^{ケイ}香^{カウ}ありふ^{マツ}ち^{マツ}して^{マツ}紫^{ムラサキ}白^{シロ}の^{マツ}草^{カウ}
 蒲^ハ乃^{マツ}根^ネい^{マツ}ま^{マツ}の^{マツ}様^{マツ}を^{マツ}立^{タテ}物^{モノ}と^{マツ}根^ネ合^{カウ}
 の^{マツ}勝^{マツ}負^{マツ}ふ^{マツ}あ^{マツ}ぞ^{マツ}ろ^{マツ}ふ^{マツ}古^コさ^サ物^{モノ}借^{カウ}よ^{マツ}いつ^{マツ}る^{マツ}和^ワ歌^カ
 の^{マツ}題^{マツ}五^ゴ首^{シュ}は^ハ物^{モノ}香^{カウ}乃^{マツ}根^ネを^{マツ}一^{イツ}借^{カウ}
 其^{マツ}物^{モノ}等^{マツ}其^{マツ}書^{マツ}の^{マツ}額^{マツ}を^{マツ}一^{イツ}所^{マツ}に^{マツ}行^{マツ}け^{マツ}り^{マツ}

一 種と草蒲と名付 二包

香五種也 一 種と郭と名付 二包

一 種と早苗と名付 三包

右の内二包つゝ試し出と

一 種と忘と名付 一包

一 種と税と名付 一包

右試なり客あり

右試三種終りて残六包よ試するに二包

をまき其内いづまかりた二包とるのぞを
残く六包を一包は焼物と一炬びり
まかり

若あ方持し成るる河ののぞを
二包を焼物負をまき

記録徳中

圓は之の点てんはげぐべーしんぷの根
長きハ猪ととるかをうりととる

少ハ星一ツ記とぐひん獨圓ひん供ひんりひんの
二ツ付ぐと高りの客ハ二点獨客ハ二点
猪ハ二点との圓一点ととる

根合香之記 香紐 一草蒲二部三草

郭 草 草 早 玄 郭

東負 点八 早十五

大定 郭 早 客 草 早 草 一点星ハ

堀江 菖 早 郭 夕 郭 三 五 星 四
 信音保 郭 菖 菖 夕 郭 四 五 星 三

西勝 五 十 三 星 九

玉江 郭 早 菖 早 夕 郭 六 五 星 一

益田 郭 菖 菖 早 夕 郭 七 五 星

安積 早 夕 早 郭 菖 菖 八 五 星 八

辛卯月日

れ之紋之幸

菖蒲の所名所を用也

安積沼 信音保沼 堀江 益田池
 長澤池 玉江 大淀 富徳川
 筑戸江 名乗池

立物之幸

紫の菖蒲五本 各れの紋れ名所の字を
 新短冊に之付

白乃菖蒲五本 大日本新金短冊を用

神の洲濱ももてを全一軒中へ通てて盤

一立づー中へ通ててすむ七五の字の文書

至りくは量の上。拵ぐ一足。至るど勝とす
 但し客二点ゆへ六燈。七至る也。其客の香
 除き楮葉もたれた時ハ六燈。七勝。負紙
 定め葉玉。みかき。て文量。み立ぐ。一盤
 の圖ハ姑の考。す。委し。尺合。と。七。文量
 鳥木。葉。楮。も。く。ゆ。ぐ。一。猪。負。の。場。り
 た。右。に。か。て。玉。圖。は。委。し。洲。淡。二。つ。葉。西
 一。玉。一。方。の。松。岩。露。垂。中。り。の。青。色。の

薄。もの。を。打。敷。す。ぐ。一。方。の。若。松。岩。草
 蒲。や。つ。ま。あ。う。ら。し。ま。右。は。月。一。古。さ。物。語。は
 老。い。沉。香。紙。も。て。ゆ。り。松。鶴。垂。中。り。の
 客。は。白。銀。を。も。て。ゆ。り。と。わ。り。打。敷。の。薄
 も。の。の。波。乃。文。よ。さ。ぎ。も。も。と。つ。つ。り。今。う。の
 好。ま。ふ。ま。あ。う。い。て。糸。社。た。も。も。用。入。ま。さ。り
 お。き。集。乃。鏡。り。透。い。金。銀。と。も。て。の。ご
 玉。の。葉。玉。は。五。色。の。葉。紙。つ。き。り。の。く

香道秘傳下

五

あ方より五ツながれで例漢のよき香也
圖より一獨客又ハ六燈ともふりたる所
此藥玉を立物よ無之

○初音香 奇藤如竹組

香五種也

- 一 四色
- 二 四色
- 三 四色
- 右の内一色だけ試よ也
- 密 一 各一包試

太ハ試み一色の香二包也

右試終りて以十一包打手也焚出をかり
 初の一燈連中聞れお終りて香一乃
 打手をかり置れをうけお終り香終
 ぶまゝに開りざる也二燈目より一燈し
 き也最初れ香ハ十燈開終りお打
 手をしりま記録をて中りたるを神考
 と記録を終り終り終り是より
 定はかり

立物の白梅 大小二本 红梅 大小二本 学二羽
 右白梅一本 学一羽 左も亦も也 打枝の少さ
 一本 学一羽 右も亦も也 打枝の少さ
 紅白梅二本の盤乃 和紅梅方 白梅
 方の速中れ 茶も 別れ 墨を あり 久
 立墨 金 經 冊 十枚 け 墨 紅梅も 同
 一 中の 徳 根 經 冊 十枚 亦も 一
 双方の 經 冊 一 梅の 古 奇 成 かく 一

大 經 冊 同 勝 する 方 一 勝 する 較 かく
 盤との 梅も かく 一 客一人 笑いの 一 枚
 一 一
 寫の 双方 尚り 較 多く とも 一 間 片
 新 客 走 入 中 笑いの 二 方 亦 又 燈 同 勝
 負の 場も 一 勝 する 方の 梅の 枝 一 寫
 二 羽 とも 一 一 一 也 後 之 燈 亦 勝 する
 方の 学 一 羽 とも 一 一 一 方の 梅の 枝 一

香道新編ノ巻下

六

と仰ぐと也十燈同終り記録とる付
 最神の香れ場一燈あり多量二番同
 より記録と尤ありづやうと記と也
 勝負へ多入の白梅方七燈紅梅方七燈
 をおるれども最神の香おほきよりあり
 一燈もてもあり多き方を勝負とて又
 白梅方九燈紅梅方八燈ありれ一燈の
 負くるとしてども最神の香よ一燈の

ありありと白梅方九燈のありはまれの
 ありありと同としてども勝負とて又あり
 一燈少くはれども最神の香ありあり
 ありありとありと最神の香記録より
 神ありとくべー又神れ字一字りつと
 ありと下あり
 白梅方上座をくべー盤乃圖すは
 上巻よ委一

初香香之記

一 秋の露 二 夕の露
三 玉名 客の露
ウ 尾花

三三三一ウ一客三一二二

白梅方

果蕨

油二三一ウ一客三一二二皆

白梅

二三一ウ一客三一二二皆

山吹

一客三一二二皆

紅梅方

新竹	油	二	三	一	客	三	一	二	八
梧桐	油	三	一	一	客	三	一	二	五
緑松	油	二	三	一	客	三	一	二	五

年号月日

○随蝶香小引 大枝流芳組

開元天寶遺事曰開元末明
皇每至春時且暮宴於宮中
使嬪妃輩爭持艷花帝親捉

粉蝶コシテラフハコシ放ニレテ之ニ隨テ蝶テラフ所ト止ト幸ニ之ニ之ニ
ニ故コト車クルマ止トりトくト御ミ家カなり

香四種也

- 一 芳カクシク花ハナと名付ナ四ヨ包ク
- 二 胡蝶コトフと名付ナ四ヨ包ク
- 三 官クワン女メと名付ナ四ヨ包ク

右各包一色片ハク試シふ也

客カク主シュ宗ソウと名付ナ三サン包ク

右試シ方カタ

右試シ方カタとく出デ香カウ才サイ一イチ包ク方カタ也ナリ右ミダ四ヨ包クを

取ト除クきク張テ八ハチ包ク焚ヤク物モノと一イチ炷テしテきキなり

八ハチ包ク焚ヤク物モノと除クきク一イチ包クれレ香カウ乃ノ也

二ニ包ク一イチ炷テしテ二ニ炷テ焚ヤク合カ也ナリ七シチ物モノ也

初ハツメ負ネりトも終ハジメ乃ノ連ツ理リと同ナリ人ヒトを

勝カチと定マシむ

立タテ物モノハ花ハナ十ジュウ弁ベン牡丹ボウタン芍シャク薬ヤク花ハナと

海棠カウボウ瑞ズイ香カウ花ハナ八ハチ仙セン躑チツ躑チツ也ナリ

香道秘傳

盤ざん十行十五間かん圖づれおく一矢やねの盤ざん
 を用もちひくも志こころる盤ざん一花はなの神かみより立た立た立た
 當あらうざるは初はつめと辛からかり當あれハ一間かん
 ばくすむ心こころ密ひそ密ひそ物もの守まもハ三間さんかん二人ふたりよりハ
 二間にかんよりるぐ一ひとさそ盤ざんの六間ろくかん月つきは銀ぎんの
 蝶てつ十じゅうかへる至いた家いえよ至いた終はつハ蝶てつを花はなめ
 と備もとへと又また十一間じゅういちかん月つきめ金きんの蝶てつ紙しを
 らぶ至いたあへる至いたハ銀ぎんとの布ぬいりわべ一

ハ燈か籠かごり速はや理りを傳つたへし人の間まの多た少せうを
 備もとへ向むかましく行い也なり此こゝの紋もん立た物もの乃なり花はな
 一ひと日ひ一ひと夜よハ一ひと芳かほ花はな三さん枚まい相あ蝶てつ三さん枚まい
 官くわん女にょ三さん枚まい至いた家いえ三さん枚まい也なり

隨蝶香之記香組

花はな約やく系けい蝶てつ三さん枚まい
女にょ花はな三さん枚まい至いた家いえ初はつ也なり

蝶てつ花はな花はな宗そう女にょ蝶てつ宗そう花はな宗そう女にょ

牡丹ぼたん 蝶てつ 花はな宗そう 蝶てつ 花はな宗そう 六む

やとぶ

香六種也

井子玉川 ぼん玉川 武蔵玉川

妙法玉川 妙田玉川 ちん玉川

右各二包づつ油一色づつ候よ出でし香は
井子でを客と定め夏あつはつゆを客と定
め秋のちの妙法と客と定め冬ふゆの妙田を
客と定むべし客と客と香の法を
張五種候とぶし試み候も亦也たゞ

とぶし六種同候うこれを開くべしうらみ
包紙より金紙の折紙よりしをし
客の一人客の三人二人より二人客を
武蔵むさしの雑まじりたる香かをか遠とほく武
蔵とれ亦またの香かの香かの香かの香か
香かありたるは客きやくの香かの香かの香か
香かの香かの香かの香かの香か
香かの香かの香かの香かの香か

消念ハハ之ハハ点何程星何程と記述と一

新玉川香記

井子林境 津岡松虫

武差 精川 神路 為水

三神 浮木 神向 老梅

井武津高路田

名未秋萩 井路 津高 武田 四足

日千鳥 武津 高路 井田 三

日卯花 井武津 高路 田 皆

日舞火 井武田 津路 高 五

日山吹 田 津 武 高路 井 一 点

日栲衣 武 井 津 高 田 路 一 点

年号月日

○巢立香ハハ小引 江芳山組

此組ハ万葉集ハハノ字のついでこの中れ
不ハハと香にハハいり生ハハはくハハはくハハに似
ていかなるハハやさうハハけハハよハハいハハあハハや

かねていつふ奇はす終り嘗れつこの中
 たる鶺鴒けいりやう子乃ある年代この古奇は生
 具徳とく多し一故一嘗れ菓くだものをたらし
 ひく雌雄しゆうゆう乃香なるは鶺鴒けいりやうの香也名
 付々を一特入此を好し嘗くと菓
 こものも名付雛ひな乃果くだものを出るに嘗
 と鶺鴒けいりやうとの別わかありはとるなり

香五種也

一四包 二四包 三四包 四四包

右の内一包は試よ物と

鶺鴒けいりやう卵たまごと名付一包

右試たし是客なり

右試終く出香十二包を二包取雌雄しゆうゆう乃
 香と名付其内へ又鶺鴒けいりやうの香一包入おま
 せく以上三包を焚たきおとせば三煙けむりの香
 ちれをお居あひまへ入いれるに開ひらくと三煙けむり同味

香五種也

札を開く此向を菓務すいりといふなりれを
 開て後のち終れ香気けいなるれ終のきと
 盤上よ至之間と心也記録も之也
 終の香けいなる人の香気盤上よ至一
 間と心べ一雌雄いゆうの香のきぬ一問はく
 之煙ともすなるれ以上五問と心也
 さて此之煙けい過すて後ハ残十包たふと
 尤一煙けいしきかり問よと心て一問

かく香終もに終盤ハ十五問ハ十終
 あり白梅一本立至香の親おや多雌
 雄ゆうをこゆと心べ一別べつハ香ハ離十
 羽終ハ離十羽うあり至香も心
 て盤よ至へ一又向ハ白梅はくばいと卵たまごを
 立至うと心との香多きハ梅よと心
 也終の香多きハ卵たまごをと心すべし
 盤ハ目終ハ終ども心すべし香多きハ終

香道秘伝

十五

中より少く花より多しと云ふ

菓之香之記

香組

一のりふ 二和菊
三星合 四三里
結と後

二結 四一 三四 二一 二二 二一 二

名系 白梅 二結 一四 二一 二二 二

系梅 二結 四一 二二 二二 二一 二

青柳 四一 二二 二二 二一 二

紫菱 結 四一 四二 二二 二二 二七

梧桐 二結 四一 三四 四二 一三 二一 三 皆

緑松 一 二 一 一 三

呉竹 二結 四一 三二 二一 三 八

寒菊 二 三 四 三 三 五

年号月日

○扁突香 流芳組

香之符也 日 三包 一三包 木 三包

右の内一包片、識し知と

香之符也

本試のこく残六包出香也れ紙をいふ字へ
 一岡次舟文字三字にゆうの字をいふ
 焼合を傳受れ連中の二粒つて三夜う
 焼合をふりてと笑べり常ハ六包を一粒
 けり六夜も焚べり字れゆり中ういたる
 ぐ〜

果 カウ アマミカ
 二 ジ フタツ
 杏 モ ハルカ
 本 ホ モト
 末 メ
 胆 タ
 百 ヒ
 林 リン

ちく九乃文字れゆりといづまうそりゆり
 おとぶ〜三字とかな

扁空香之記 香組

日本	木	一	百
名素	旦	本	百
名素	本	百	杏
名素	果	本	司

日 一 木
 紅梅 淡石 白波

皆 一 四

名香 一 日 本 果

二

名香 旦 香 末

三

年月日

○曲水香小引 流芳組

曲水の宴いもろくにわく周の世より
好く我國のその顕宗天皇元年誕生
上れ己の日文人詩奇れく東流のをと
まはく盃を上より流しその盃を我

茶を通うざる中に詩をゆり酒を女
をさそへぬ事と写しゆり今此香紙の
礎石運来心竊待牽流端適手
先遮とゆり詩のきんよゆり

一 四包 二 四包 三 四包

香少待也

たし内一色は試しゆり

客一色試たり

右試るべく強十色を焼出とて一色十包

香道新編

十六

香ねぶくばく一燈開き也盤の入りと特
 繪ふ一十約よ十二月より六月の間一
 瀨あり波を畫と岩を畫と向ふは
 柁たの立物一本をまゝおたあう人較
 かど金銀の盃と流と一始より盃を
 とれ一燈焚て一向てむかり客の一人
 こそも二人せし二るころ一とを盃と
 目乃流り至り七回目一流を越る時

閑徳の一人の其次れ香焚あるかとも
 盃を通さるるば又も次の香を閑徳
 後五とぶ一柁を越る時又徳に過
 怠なり礎石運来といふ意あり六回目
 こそも其次を焚あり一人のともぐら
 づ一向の柁たの奉まゝ早く盃至り
 を勝と定むべし包紙の試よの奉包を
 用い出香の視包のけを用ひて奉の縁

香道新法

十六

くつり終り也盤乃月ハ水れ巻一はく別つ
 圖乃ぶく

曲水香之記 香組

一 浮橋
 二 孫分
 三 山里
 客 まうさ

高木
 紅梅 一 二 三 一 二 三
 子梅 一 二 一 二 一 二 三

日 日
 徳花 三 一 二 三 四
 緑松 一 二 二 三

年号月日

○関守香 小引

流芳組

此組ハもろろハ孟嘗君といつる人
 わり秦王よらうりハ夜ハはむれ
 のが終出ハた函谷ハ関雞の鳴る
 かまろハ人ハ通ハをさじ孟嘗君がこ

千の客の中は雞のわく音こゑはよくきこ
 とは人かきこえしごとく移うつをしつたが
 関守せきしゅはよの雞の鳴ないやういさむに
 うつたう関せきを開ひらき通とほうくるとも也
 彼雞かのとりにのそと糸いとよわごとく移うつるも
 うけしゆり

香かの行ゆき也

- 一 二包
- 二 二包
- 三 二包

右の内一包は試しゆり也

客雞かきとりにと名付なづ二包試しる

右試しるごとく移うつる六包打うちせ焚たき物ものと連ま中ぢゆう
 盃さかずき當あ君きみ方かた関守せきしゅ方かたと両方りやうかたへ別わか色いろ試しる
 此香このかの移うつるともて終おひり開ひらき記し録りよくとて
 れは一度いちどく移うつるはうけしゆりも盃さかずき當あ君きみ
 君方きみかたの随ま分ぶん試しるも移うつるは勝かちとて雞
 の香か獨ひとり々々二点にてんこ人ひとより一いち点てん雞とりにを
 得えるは人ひとの心こゝろを移うつるは

関守方よの隠分れを満うざるやうにお
 らく女を^ひ笑を^ち勝く守若^りや^ら満れん^り星
 一うく^まよの^ん点一う^ろ難を^ん休^ま満^まい^る意^ん乃
 星^二う^ろ関^ま南^うざる^り何^んの^ん点^ん二^うら^ら堂^ら若^ら方
 々^より^りの^り関^守方^のは^はる^んと^あり^し因^りと
 遺^ん息^ん多^し一^を女^をを^ん笑^を来^し十^は若^ら乃^の古^の例^よ
 なる^しい^し出^る香^は六^は包^の曉^の何^のね^し
 か^らら^ら也

関守香之記 青紐

- 一 花^を衣^ふ
- 二 袖^の一^は
- 三 二^は字^の
- ウ 三^は字^の

ウウニ一ウ三

孟嘗君方点四頁了

^多白^梅 一^は三^はウ^二ウ^一
^日袖^襦 三^はウ^二ウ^一
 四

関守方点六

香柳	三	ウ	ウ	一	二	三
紫菱	三	ウ	ウ	一	二	三

年月日

○玉橋香 小引 落葉庵直風組

天浮橋ハ開闢の始なりハ只一燈と
 云乃材ハ二燈 露の玉橋ハ七夕
 此星合の橋なりハ二ウ合ニ終ニ詮
 かりやと占問橋ハウヤクノヤクニ

試かり客れ香とん

香四種也

天浮橋 二包 雲の材 三包
 露玉橋 三包

右内一包は試よ出と

占問橋 二包 試かり

右試三包終りて出香七包打まず禁お
 出香七包ハ七夕 露の玉橋ハ二燈とん
 のをを表と
 右包ハ後の一燈ハ二点以上三点とる始

しくも後よそも一燈笑へいすまうと水
 かり占問持へ一人問へ三点二人より
 二点より久し札紙まき笑べし亦乃香の
 占り一点はるり

西條香之記

浮橋 五平終川
 雪村 漢火
 玉橋 新うま
 白問持 村西

雲占 浮玉 雲玉 占

早梅 雲玉 浮玉 雲玉 占 五占
 水仙 雲玉 雲玉 浮玉 占 二占
 玉橋 雲玉 浮玉 雲玉 占 十占
 雪竹 占玉 雲玉 浮雲 一占
 年号月日

○子日香

山本秀範組

ちとせまて 二色 かなんねり 二色
 ちとせまて 二色 かなんねり 二色
 ちとせまて 二色 かなんねり 二色

香立修也

右内一包は、試よ也

五代やん、一色試よ、寄也

右試四包終つて出香五包打手ぞ終つた
 連中寄日那方まんなうすかのうへ暖藏那方あづかんのうへとある方へそ
 けり終つて一盤の盤いそては、一筋横ハた二目
 かり中、勝負まうぶの場であり向むき小松六本
 多あ小松六本大ねの双方に二本一也
 是の金おかり小ねの関まぐよとらうい一本

は、勝かつ方方よりいさあ一人連中香ね
 何程ゆもねの終はつ方方より一本
 一寄終つた二本一人より一本いれ也
 双方れ人形も関まぐよとらうい終つて
 のねらまはけくさば向の地へ入くまを
 らぐ一香終つたもねを引盡さば盤
 の勝負まうぶの終はつもかり又ね引はくさば
 香終つた多く引取一方を勝とす也

三の香ね

記録の當りざつと記とれより一字づつ書
多し記録と又いふ字は用也一おの双
方ともねを各人形は紛かり

色 しやせ 席 いす 題 だい

曲 まが 流 なが

子日香之記 香組

色 席 曲 流
記 用 凡 色
者 袴

春日部方十二点勝

^名白梅 席 色 曲 流 記

^日玉桂 席 曲 流 記

^日水仙 席 曲 流 記

議 議 部 方 八 点 負 了

^日緑松 曲 席 流 記

^日青竹 席 流 記

^日梧桐 席 曲 流 記

二 二 四 四 六 二

年号月日

香道秋農之下終

秋農之續編

香道千代農秋

全部四冊
退方版行

杏熏堂藏版

享保十八癸丑七月吉且

堀川通高辻上町

植村藤右衛門

通石町三町目

植村藤三郎

東都書坊

高麗橋壹町目

植村藤三郎

攝陽書坊

